「寛政の改革」を断行した老中
松平定信の晩年の日記 初の全文翻刻！

花月日記（かげつにっき） 第1～4

史料纂集古記録編　第209・212・214・216回配本（既刊4冊・全6冊予定）

岡嶌偉久子・山根陸宏 校訂

【第1】文化9年（1812）4月～文化10年（1813）12月　（2020年12月刊行）
A5判上製・函入・300頁・定価17,600円（本体16,000円＋税）　ISBN978-4-8406-5209-4

【第2】文化11年（1814）正月～文化12年（1815）12月　（2021年12月刊行）
A5判上製・函入・332頁・定価18,700円（本体17,000円＋税）　ISBN978-4-8406-5212-4

【第3】文化13年（1816）正月～文化14年（1817）12月　（2022年7月刊行）
A5判上製・函入・260頁・定価17,600円（本体16,000円＋税）　ISBN978-4-8406-5214-8

【第4】文化15年（1818）正月～文政4年（1821）12月　（2023年5月刊行）
A5判上製・函入・328頁・定価18,700円（本体17,000円＋税）　ISBN978-4-8406-5216-2

江戸幕府老中、松平定信（1758～1829）の晩年の日記。白河藩主致仕の日をもって起筆、以後逝去の前年までの日記。定信の見識を通じての、当代の世情、事件、及び政治・文化面の具体的な記述、様々な人物への評言には、実に興味深いものがある。

若くして徳川幕府老中首座・将軍補佐となり、「寛政の改革」を断行した松平定信が白河藩主致仕の日（文化9年4月6日　55歳）を以て起筆、以後、逝去前年の文政11年末まで書き続けた17年間の日次記がこの『花月日記』である。

退隠後は、住居を江戸築地の藩邸下屋敷「浴恩園」に移し、自ら「楽翁」また「花月翁」と称した。優雅な擬古文でつづられた当『花月日記』の記述の多くは、約2万坪の大庭園「浴恩園」での、四季の花々を愛で、月を賞し、心知れる友と語らう、風流清雅な日々の記といってよい。文中には、その時々に数多の和歌が詠み込まれ、さながら歌日記の態をなしている。定信生前に歌集として版行されたのは『三草集』930余首のみであるが、この『花月日記』に詠み込まれた歌は各年300～400首を超える。

日記中によく登場する人々は子息や娘たち、近親、またごく親しい友人たちである。記述中には幕政に対する批判は厳に慎んでいる。繰り返されているのは当代の御代の豊かさに対する賛辞と感謝である。しかし、やはりその中には、定信自身の思い、考え、また志といったものも、折々に現れてくる。定信の心情が思われる。

なお、「浴恩園」は閉鎖された旧築地市場（東京都中央区）の広大な跡地に眠っている。数十年にわたり地下に埋もれてきたが、都などは東京五輪・パラリンピック後の再開発に伴い、初の発掘調査を検討。庭園の再発見と実態解明に期待が高まっている。

八木書店　〒101-0052　東京都千代田区神田小川町3-8
Tel:03-3291-2961／fax:03-3291-6300　pub@books-yagi.co.jp　https://catalogue.books-yagi.co.jp/

PP 202305 15000